# 解説 19　　ラプラスの悪魔からの哲学的挑戦

【課題のねらい】

私たちは日常、さまざまなことがらを「当たり前」と思って暮らしています。世界が原因と結果の連鎖の法則（因果律）に従うのも、私たちの心が自由であることも、私たちは「当たり前」のこととして受け入れています。しかし「当たり前」と思うことがらが本当に「当たり前」のことなのか、一度じっくりと腰を落ち着けて考えてみるとき、私たちは世界の別の姿に気づかされます。常識だと思っていた世界の新しい姿が見えてくる、これが哲学の魅力です。哲学的考察の第一歩としてこの課題を設定しました。

【解説】

ある出来事（結果）は、それに先行する出来事（原因）によって、すでに決まっているという考え方を「決定論」と呼びます。

20 世紀に登場した量子力学以前の物理学のことを古典物理学と呼びますが、古典物理学の世界では決定論的な自然観が一般的でした。また量子力学の登場によって、単純な因果関係ではなく確率論的な自然観が広まりを見せますが、確率論的にであれ、原因によって結果があらかじめ決まっているのだとすれば、それは決定論（確率論的決定論）ということができるでしょう。

決定論的なものの見方は、少なくとも物体の世界、つまり自然界に関する限りは、きわめてよく機能しており、一見正しいように思えます。しかしこれを私たちの心にあてはめるとき、いくつかの難しい問題が浮かび上がるのです。

一般に、私たちは自分自身の意志で、ある行動を選択すると考えられています。自分の意志というものは、自分以外の誰からも邪魔されることはありませんから、自由です。そこでこれを「自由意志」と呼びます。私の行動は私が自由意志によって選んだものであるというのは、広く受け入れられている考え方です。じっさい、私たちは何か悪いことをすると罰せられるわけですが、これは、私たちが別の行動を意志することが自由にできたのにもかかわらず、あえて自分自身の意志でその悪い行動を選んだからにほかなりません。

ところで、ここに決定論の考えを導入するとどうなるでしょうか。決定論ではすべての出来事はそれに先立つ原因によって決まっていますから、そこに自由意志の入りこむ余地はありません。そして、原因と結果の連鎖は私たちの生まれるずっと前から始まっています。もし誰かが犯罪を犯したとしても、それはその人が自分でそうしようと思ったのではなくて、その人が生まれる前から決まっていたことになります。そのときに彼を罰することは「正しい」ことなのでしょうか。

私たちの心の中にまで決定論を適用し、自由意志の存在を認めない立場を「固い決定論」といいますが、この固い決定論の立場では上に挙げたような道徳的な問題が生じます。これに対して、基本的に心の中にまで決定論を適用するものの、倫理的・道徳的問題に限っては自由意志の存在を認める立場のことを「やわらかい決定論」と呼びます。

一方、たとえば私たちの心の中など、決定論はすべての場合にあてはまるわけではないという立場を、「非決定論」と呼びます。しかし非決定論の立場をとるとしても、私たちの心がまったくの自由であるかというと、どうでしょうか。私たちの心は、生育環境など身のまわりのさまざまな要因から何らかの影響を受けています。

そのとき、心はどのような法則で動いているのでしょうか。

決定論をとるべきか、非決定論をとるべきか、この問題にはまだ決まった答えはありませんが、古代以来、多くの哲学者たちが世界について、また私たちの心について考察を重ねてきました。ぜひ、哲学者の書物を手にとって、ともに哲学の道を進んでいきましょう。

また、いきなり哲学の本を読むのは難しそうだと考えている方には、イラスト入りの分かりやすい入門書をご紹介します。お気に入りの哲学者を見つけてみてください。


・斎藤哲也監修、田中正人著『哲学用語図鑑』プレジデント社、2015 年
・斎藤哲也監修、田中正人著『続 哲学用語図鑑』プレジデント社、2017 年
・哲学思想研究会編『図解哲学 人物＆用語事典』日本文芸社、2015 年